



TITLE:

京都外科集談会抄録 + 会員動静など

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会抄録 + 会員動静など. 日本外科宝函 1953, 22(4): 410-414

ISSUE DATE:

1953-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205998>

RIGHT:

京都外科集談会抄録

昭和28年3月臨時会

- (1) Fluorophotometer による尿中 Estrogen の化学的定量法に就て
西谷 奎 吾
- (2) 脾全剝(切除)後の血糖値とインスリン投与量の変動
河村 健次郎
- (3) 脾全剝を中心とする脾手術後の血清コレステリン値と脂肪肝
青木 秀 夫
- (4) 脾全剝を中心とする脾手術後の消化吸収能に就て
浜野 研 蔵
- (5) 脾全剝を中心とする脾手術後の血清アミラーゼの変動
上野 洋
- (6) ニコチンゼイシヨンに依る昏睡穿刺
(発言, 黄雲裳, 半田肇, 石井昌三, 荒木教授)
藪野 重 一
- (7) 日本人のRH因子に就て——特に其の輸血副作用との関係
横山 育 三
- (8) 保存血輸血の副作用に就て
横山 育 三
- (9) 保存血輸血の腎臓機能に及ぼす影響
(発言 荒木教授)
横山育三・松木軍太
- (10) 後部縦隔に発生した肉芽腫の一例
麻田 栄
- (11) 癌に於ける封入細胞に就て
(発言 黄雲裳)
武田 進
- (12) 経静脈脂肪輸入に関する其の後の研究
日笠頼則・麻田 栄
塚田 朗・巽 亘
西野忠之・片岡典正
- (13) 男子乳癌に対する睪丸剝出術の効果
(発言, 荒木教授, 木村助教授, 武田 進)
増田 強三・景山直樹
伊勢田幸彦・西部仰三
- (14) Mastopathie の内分泌学的研究
増田強三・武田 進・西谷奎吾
伊勢田幸彦・小崎信志
片岡典正・菱和田卓朗
- (15) 脾十二指腸全剝出の実験的並に臨床的研究
(発言, 荒木教授, 木村助教授)
本庄 一 夫
- (16) 学童先天股脱治療の経験
(発言, 木村助教授, 山田講師, 森田講師)
有原康次・村田秀雄
- (17) 消化管知覚の系統的組織学的研究
木村忠司・大津 章・田中信義
大川 弘・井上尙史
- (18) 神経癲に於ける知覚麻痺の括がり形式
竹友 隆 雄
- (19) 所謂根性坐骨神経痛の病理と治療
(発言, 木村助教授, 森田講師, 九間外喜雄)
山田憲吾・伊藤鉄夫
- (20) 肺結核手術に対する閉鎖循環式麻酔の実際と其の利用価値
青柳 教授

昭和28年4月例会

- (1) 急速に経過せる上顎癌の一例
外科第I講座, 中山 昌 和

55才の男子の右齒齦部より頬部にかけて増殖せる角化性扁平上皮癌で自覚症状発来後約2ヶ月半で手掌大に発育し4ヶ月にて死亡せる例でその急速発育の原因

としては最初に齒齦膿瘍と診断し加えた切開並にガーゼドレーン挿入による機械的刺激が腫瘍細胞に対し直接に賦活的に作用し、更に切開部の肉芽発生及軽度の感染による周囲の肉芽発生は腫瘍細胞の膠原細胞組織を利用して増殖する性質に好条件となり換言すれば間接的に培地として腫瘍の増大を促したと考えられる一例である。尚此の患者にはナイトロミン並にレントゲン照射は全く無効であつた。

(2) 肺ゴム腫の一例

佐 藤 堯

古来稀有なる疾患とされている孤立性肺ゴム腫を55才の男子に於て経験した。主訴は血痰。2年前より血痰を出す様になり、1年前より右側胸痛あり、最近レ線像で右下肺野に手拳大の腫瘍様陰影を発見せられて来院した。

本症例では ①経過比較的水く、悪液質の認められないこと ②血液像にエオジノフィリーなく、又喀痰中に寄生虫や結核菌を認めなかつたこと ③無熱に経過すること ④レ線像で腫瘍様陰影の境界鮮明にして、且肺梅毒の好発部位たる右下肺野にあること ⑤項部淋巴腺腫瘍が梅毒を考えさせたことより血清ワ氏反応を調べ強陽性にして且梅毒の既往歴あるをき、肺ゴム腫と診断した。1年間駆梅毒療法を行つたが、著明には陰影の縮小をみず、頻回の大咯血を繰り返す様になり1年後再入院し肺切除術を行つたが不幸にして死亡したものである。病巣は右中肺葉にあり、空洞を形成、中に壊死物質をいれ、心臓と強く癒着していた。組織検査では肺ゴム腫であつた。

(3) 瘰癧ケロイドに対するナイトロミンの 一使用経験

高 山 文 三

硝酸による腐蝕を両手、両下肢にうけ、その後約4ヶ月目頃より発生した瘰癧ケロイドに対し、局所的にナイトロミンを用いた。

切除可能のケロイドに対しては、これを切除後、0.1%ナイトロミン溶液を創縁皮内に注入、縫合したが、疼痛、発赤、腫脹、水泡形成、一部は壊死を生じた。この相当激しい副作用は該時使用した薬品の純度に原因するものかと疑われる。創面癒合はナイトロミンの注入により特に遅延するとは思われない。又この部のケロイドの再発は術後3ヶ月の現在皮内の硬結は認めるが、膨隆はなく、色素沈着も軽度である。

切除不能のケロイドに対しては0.1%ナイトロミン溶液のケロイド実質内注入を行つたが、認むべき効果はみられなかつた。

(4) ナイトロミンの一作用点に就て

石 上 浩 一

ナイトロミン N.M.O. の作用機構としては腫瘍細胞のDNA代謝の攪乱が注目されている。私は N.M.O. の抗腫瘍作用が生体内に於てビタミン B₆ により減弱さ

れる事実に着眼してビタミン B₆ を活性簇に含む トランスアミナーゼに対する本剤の影響を見た所、各種腫瘍組織中の該酵素に対して N.M.O. が著明な抑制作用を呈する事、正常動物肝臓中のそれには認むべき作用を呈しない事、ビタミン B₆ 自身では抑制作用に対する拮抗作用が無い事を実証した。腫瘍の酵素像が質的には正常組織と大体同じであり、又腫瘍の発生母地、原因等にかゝらず其の酵素像が質的量的に共通な形に集約される点より、又 N.M.O. の抗腫瘍作用を特に期待されるのは癌細胞巢の外部、血管の周囲、他の組織に侵入している細胞に対してである点を考慮して其の使用基準を考按し、又 N.M. 属中で抗腫瘍作用の特に強力な SK 1424, SK 2032 がピリドキシン構造を有する事を指摘した。

(5) 諸種脳疾患の脳波的診断に関する二三 の試み

山本竜蔵・坂田一記

何等かの方法で脳細胞の機能変調を来さしめることにより脳腫瘍等の脳波的診断に益する可能性がないか、又癲癇脳波の新しい賦活法がないかと考え差当り次の三つの方法を癲癇、脳腫瘍等について試みた。

1) 頭部平流通電。頭部と両腕間及び前頭後頭間に50V以下、0.5~2mA、1~20分間の通電を49例に行つた。全般に速波及び基線の動揺の著明化が多いが、癲癇の著明な賦活効果も認められず、焦点的变化のみられるものでも必ずしも病巣に一致しない。又極性により明瞭な差を認めない。

2) アルコール静注。純アルコール 1.5~6ccを10~15%溶液として19例に静注したが賦活乃至局所診断に役立つと思われない。

3) 脂肪乳剤静注。15%乳剤30~50ccを8例に静注したが、注射後30分乃至1時間で著明な徐波、Spike, Spike-and-wave を来したものが多く、その変化に局所差を認める。この原因としてリポイドによる脳細胞機能殊に表面透過性等の変化が最も考えられる。

(6) 松果体附近組織と身体生殖器發育

半 田 肇

松果体が果して身体生殖器發育に関係を有するかどうか、又視床下部に隣接した視床上部、即ち松果体附近組織の破壊によつて身体生殖器發育に何等かの影響があるかどうかを確かめるために、生後1~2ヶ月体重300瓦前後の幼若な雄雛を用い、1) 松果体附近のみの破壊実験(主に経皮的の方法による針金小片封入、及び電気凝固実験)、2) 松果体同種移植実験を行い、以後5~6ヶ月間飼育観察し、その間の鶏の生長發育、特に第2次性徴、生殖器に及ぼす影響を検した結果、身体生殖器發育に関与する部は松果体自身ではなく、第3脳室脈絡叢を取り囲む諸核、即ち Nucleus habenulae medialis, Nucleus dorsomedialis thalami anterior, Nuclens interuus superior であると考えられる。従来之等の諸核が發育に関与すると主張した人は

ないが、之等の諸核が元来如何なる機能を有しているかを系統発生的に考察すると何れも視床下部と密接な關係を有して居り、又私の実験結果を組織学的によく検討すると、(1) 同じく Nucleus dorsomedialis thalami anterior の損傷でも第3脳室壁に近い部に變化が強い程發育障礙が強い。(2) 之等3核以外の損傷例で發育抑制を來した例では何れも多少第3脳室上部に變化が認められた。(3) 發育促進例では第3脳室の輕度の拡大が認められた点から考えて、性機能の支配上位中枢はやはり視床下部にあり、之等第3脳室脈絡叢を取り囲む諸核の損傷は間接に視床下部の所謂「性中枢」に神経性又は神経体液的に何等かの影響を及ぼして發育異常を來したと考える。従来身体生殖器官發育に対しては、専ら下垂体間腦系のみが重視されている傾向があるが、松果体附近組織、即ち視床上部の損傷でも明かに發育に關与する。

(7) 腸間膜裂孔内嵌頓に因る腸閉塞症の一例

重 永 正 之

症例。67歳男子。主訴。腹痛及び嘔吐。現病歴。17日前痔核の手術をうけて以来便秘となり時々腰痛と下腹部緊張感あり。昨夕稍大食し間もなく悪心、嘔吐及び下腹部疝痛を來す。吐物は糞便状なり。腹部所見。下腹部膨隆し全体に筋性防禦あり、左下腹部圧痛著明急性症状を呈してより17時間後に開腹すると血性漿液性腹水あり。廻肩部より約20cm口側の小腸間膜裂孔内にS字状結腸嵌頓し反時計針方向に180度捻転す。嵌頓腸管により裂孔周囲に存在する大なる小腸動脈が圧迫され小腸下部約2.5cmも壊死状を呈す。裂孔は大き約3×4cm、楕円形、邊緣平滑、稍肥厚し漿膜にて被われ先天性と思はれる。嵌頓S字状結腸及び壊死小腸を切除、吻合し一度縫合不全を來せしも再手術により2ヶ月後に治癒せしめた。尙本症に対する若干の考察を試み、本邦症例38例を蒐めて統計的觀察を加えた。

(8) 蛔虫卵による慢性線維性脾臓炎の一例

横 山 育 三

41才の農婦、數年来年に4乃至5回、上腹部疼痛發作を來し、約2ヶ月前から左季肋部に、横に細長い鶏卵大腫瘍を來し、同時に、毎食後上腹部に疼痛を覚えるようになった患者を、脾臓癌を疑つて手術し、脾臓体部及び尾部が硬く腫脹していたので、頭部を残し、腫瘍を切除し、経過順調で全治退院。術後2ヶ月の今日、健康で家業に従事している。切除標本の拡張した

脾管内に雌性蛔虫及び虫卵の迷入を認め、組織学的には、小葉内及び小葉間結締組織の増殖、所謂虫卵結節、好酸球浸潤、所によつては、小脾管の拡張等を認めた。文献例を検するに、本症は女性壮年者に多く、術前推定診断は左程困難ではないが、確定診断には試験切片を必要とする。駆虫及び、对症療法により自然治癒の傾向があるから、一般的には、診断が確定したなら、まづ保存的療法を行つてみるべきものと考え

(9) ヘパトームの一手術例

久 保 田 信 孝

山口某56才男左官業昨年9月中旬突然右季肋部の疼痛性疼痛中等度の発熱と共に超驚卵大の膨隆のあるに気付き当外科に入院入院時全身所見に異常を認めず、局所所見として、右季肋部に上境界を除き稍々明瞭に触知し得られる超手拳大、表面平滑、緊満弾性、振子運動可能、呼吸性非固定性なる腫瘍を触れ諸検査にてスベルミン反応陰性、血清高田氏反応陰性、十二指腸液採取不迫であつて、腹部レ線透視にて右季肋部の超手拳大の腫瘍と十二指腸下行部の左方圧排所見を証明したので胆嚢水腫の診断の下に開腹したる所胆嚢及び、右腎は全く正常に認められ肝右葉下縁より突出状に發生した肝腫瘍でこれは胃幽門部、十二指腸下行部に相当広範囲に癒着し、輕度の肝硬変所見を認めた。よつて、腫瘍全周の連鎖結節縫合による肝部分切除にて腫瘍の完全剔出に成功。その組織學的診断は、ヘパトームであつた。術後経過良好十四日目に退院したが三ヶ月半にして再発症状を來した一症例を経験したので茲に報告す。

(10) 肝硬変症に対する脾動脈結紮切断の經驗

吉 友 睦 彦

わたくしは最近定型的 Laennec'sche Lebercirrhose の比較的初期と思われる患者に、脾動脈結紮、切断術を施し好結果をえたと思われるので報告した。患者は術後6ヶ月の今日元気で家業に従事している。

脾動脈結紮はバンチー氏病その他摘脾の対象となる疾患で摘脾の代用として、また門脈圧亢進症に対しては最近行われるようになってゐる。肝硬変症については従来は門脈下空静脈吻合術や脾腎吻合、タルマ氏手術などが行われているが、これらに比し安全でしかも積極的効果を示すものとして本手術を推奨するものである。

会 員 動 静

下 村 一 郎	新住所	東京都板橋区上板橋町3丁目3603
古 屋 野 宏 平	〃	長崎市上西山131
食 内 道 治	〃	大阪市寝屋川市萱島 寝屋川市国民健康保険直営診療所外科
岡 田 斌	〃	徳島県鳴門市瀬戸町(鳴戸市民病院分院)
重 永 正 之	〃	鳥取市西町1(鳥取日赤)
円 井 一 示	〃	石川県江沼郡山中町(国立山中病院)
財 津 晃	〃	山口県宇部市 山口医学大学外科学教室
柴 田 清 人	〃	名古屋市瑞穂区(名古屋市立医大外科)
鷲 見 洋	〃	岐阜市安良田町2-3

編 輯 後 記

○原稿が殺到して、編者がその整理に悲鳴をあげるようになったのは喜ばしい傾向であるが、難を云えば長すぎる原稿が多いように思う。簡にして要を得た珠玉の秀篇を一篇でも多く収録したいのが編者の念願である。原著10頁以内、症例3頁以内の不文律を守つて、日本外科宝函の内容充実に御協力あらん事を祈つて止まない。シェークスピアの言葉を茲に引用すれば“Brevity is soul of wit”とでも云うべきであらう。

○発行をおくらすまいとする編者の必死の努力にも拘らず、どうしても発行が出来る傾向にある事は申訳ない。之は一篇でも多く、又早く掲載しようとする編者側のサービスのせいもあるが、原稿提出をぎりぎりまで引きのばされる著者側の罪もないわけではない。爾今、原稿提出済のもの以外は絶対に予告欄に予告しない事にでもしなければこの不面目はとりかえす事は出来ないと思う。投稿の方に発行者の身になつて原稿を書いていたゞくよう切望する。

○復刊以来誤植の点には常に充分注意を払つて校正して来たが、未だに誤植に關する御叱正をたえず頂いているのは、編者としてもお耻しい次第である。今後校正陣を強化し、第一校はすべて著者校正で推して行くつもりでありますから、第二校の編者校正においてもその意のある所を汲んでいたゞいて御協力を賜りたい。

○現在購読者数と諸経費との均衡がとれず、財政的均衡のしわよせが、専ら掲載料にのみ集中していることは、本誌の発展の上からも健全な姿ではない。一人でも多く購読者をふやし、投稿者の負担を軽くし、而も充実した内容にする事が我々の悲願である現在会員である方々が一人宛でも会員を獲得して下さつたら、財政はずつと楽になるにきまつている。会員諸彦の御尽力を祈るや切である。

○我々編者も、鳥瀉先生の遺訓を守り、品位ある高級な、それでいて掲載の早い誤植のない純学術雑誌としての日本外科宝函の育成に智鈍を捧げ菲才をそゞぎ一意邁進する覚悟でありますから、一層の御叱正御教示を賜りたい。
(藤田栄隆記)

日本外科宝函 22巻 3号 腱紡錘の研究(桐田論文)の訂正

樹枝状又は灌木状を呈す。多種多様に分枝した終枝、終網の状態を仔細に観察するに、終枝、終網内の多数の神経原線維は神経原線維周囲物質に依り結合せられ、終枝内では迂曲は少いが終網内では互に吻合して微細な網を形成し、その一角より更に神経原線維が派出し

同様の終網を形成し隣接終網との間に吻合枝を出すものもある。終網の周囲との境界は判然としていて、Cajal氏染色に依るとその周囲は屈折率高き透明層で明かに区別されているのを見る。

投 稿 規 定

○本誌は毎年1月, 3月, 5月, 7月, 9月及び11月の1日に発行する。

○本誌予約購読者の原稿を掲載する。

○原稿の長さはおおよそ下記の限度とし, 和文原著には欧文表題, 欧文抄録, 欧文原著には和文表題及び和文抄録を添附されたい。

原著論文, 綜説, 臨床400字詰40枚以内 (図表共)

症例報告, 研究速報, 400字詰15枚以内 (図表共)

○原稿の当編輯室へ到着した日附を受付日とする。

○原稿の用語中, 固有名詞はすべて固有の文字を, 又数字はすべて算用数字を使用し, 日本語化した外国語は片かなでかく事。この際「」は不要。

○数量の単位は下記の例による

例, m, cm, mm, cc, Kg, g, mg, °C, μ,

%, pH, 等

○原稿は横書とし新かなづかいを用いる事。

○欧文及び欧文抄録はタイプライターで記入され度い。

○挿画, 曲線等は必ず白紙又は青線方眼紙に墨で清書し挿入位置を原稿に記入する事。

○引用文献は篇末に集め, 次の例に準じて記載する。

(氏名)

(表題)

Beatson, G. T, On the Treatment of Inoperable

(雑誌名) (巻)

Case of Carcinoma of the Mamma. Lancet, 2,

(頁) (年代)

104, 1896

三宅 儀 副腎皮質ホルモンの測定と臨床 最新医学 6, 765, 昭26. 9.

○掲載料は当分の間実費とし概算前払いとする。1頁1,000円但原著以外のものに就ては3頁までは無料とし3頁を超えた分に対しては原著と同じ取扱とする。この費用中には図表写真版等の費用は含まない。

○特に早く掲載を希望し掲載号を指定される方の掲載料は上記1割増とする。

○執筆者に於て別刷希望の方は, 寄稿と同時に特に附言せられたい。10部までは無代進呈し, それ以上は実費を申し受ける。

○原稿は書留郵便で下記に送られたい。

京都市左京区聖護院川原町五三

京都大学医学部附属病院外科学教室内

日本外科宝函編輯室宛

昭和28年 6月25日印刷

昭和28年 7月1日発行

編輯兼發行者

京都市左京區聖護院川原町

荒 木 千 里

印 刷 者

京都市下京區油小路松原上ル

松 崎 秀 雄

印 刷 所

京都市下京區油小路松原上ル

松 崎 印 刷 株 式 会 社

京都大学医学部外科学教室

發 行 所

日 本 外 科 寶 函 編 輯 室

代 表 者

荒 木 千 里

(猪子・伊藤両教授記念会)

(振替口座京都3691番)